



僕のスライムは 世界最強3

Q L P H Q L I G H T

空 水城
Mizuki Sora



アルファライト文庫

ナナガ・ロボロ

ラミアの妹。好戦的な性格で
大蛇の従魔を従える。

ラミア・ロボロ

モンスタークライムの一員の妖艶な女性。

ファン・リズベル

おとななじみ
ルウの幼馴染の女の子。
冒険者として有力パーティーに
所属している。



ロメ&マッドウルフ

冒険者に追われて
逃亡生活を送る
不思議な少女。

シャルム・グリューエン

冒険者ギルド職員の
クールな女性。
従魔は悪魔種のレッドアイ。

ルウ・シオン&ライム

ちょっと気弱な
駆け出し冒険者の少年。
従魔のライムは【捕食】
スキルを持つスライム。

クロリア・ハーツ&ミュウ

ルウとパーティーを組む少女。
従魔のミュウは回復や支援が得意な
ハピネススライム。



呪われた一族

1

(私は、いつも一人だ)

どことも知れぬ森林の奥で、少女はふとそう思う。

周囲にはただ静かにこちらを見下ろす樹木たちが立っているのみで、人っ子一人いない。時折、風に揺られて葉音がざわめき、寂しさを紛らさせてくれるのが救いだった。とぼとぼと行く当てもなく森を歩きながら、彼女はその音に耳を澄ます。

思い出すのは故郷の村の近くにある、小さくて静かな森。

そこにはいたときも、彼女はずつと一人ぼっちだった。

「……」

寂しさには慣れていたつもりだったが、村のことを思い出すと、胸を掴まれる気持ちになってしまう。

別に、一人ぼっちだったことを気に病んでいるわけではない。

元々、愛想はない方。性格も良いとは言えないのに、友達がいなかつたのは仕方ないと、大いに納得している。

それでも、もやもやとした気持ちが否応なく湧いてきてしまう。

少女は小さく息を吐き、心を落ち着かせるように慎ましい胸元に手を当てた。

「おい、あのガキはどこに行つた!?」

「まだその辺にいるはずだ！」

「急いで探し出せ！」

静かな森に、男たちの粗野な声が響く。

——まつたく、こんなとぎくらいは静かにしておいてほしい。

人知れず、膨れつ面を浮かべると、少女はすかさず走り出した。

森にうつすら線を引くようにできた獸道をひたすらに進んでいくと、前方に黒い狼の背中を捉えた。

マッドウルフだ。

まだ子供なのだろう、仲間を探しているのか、小さな体をせわしなく動かしてすんすん

と地面を嗅いでいる。

好戦的な野生モンスターなので、油断は禁物だ。

しかし、少女が走る勢いを緩めることはなかつた。

彼女は幼い声で呟く。

「……あの子なら」

やがて少女に気づいた黒狼は牙を剥き出し、爪を立てて突進する構えを取つた。

それでも躊躇わずに突っ込んでいく少女は、別に怖いもの知らずでもなければ、冒險者

顔負けの実力者というわけでもない。

ただの幼い——従魔を授かる歳にも満たない普通の女の子だ。そう、ある一点を除いては……

「グルア！」

咆哮とともに地面から飛び上がる黒狼。

少女はわずかに体を反らし、飛びついてくる黒狼を寸前で躱す。

さらにその黒い影を横目で追いながら、彼女はマッドウルフの体に右手で軽く触れた。

性格はともかく、運動神経と反射神経は割と良いと自負している彼女にとつては、そこまで難しいことではない。

一瞬の交錯が終わり、両者は獸道の中心で背中を向け合う。

少女が恐る恐るマッドウルフの方を窺つてみると、黒狼も同じタイミングで振り返つた。しかし、どこか先ほどとは様子が違う。

口を閉じ、剥き出しになつていていた歯は隠れてしまい、針のよう逆立つていた黒い毛もすっかり萎れている。しまいには、少女の目の前で姿勢正しく座り、まるで従魔のようなくちゅうめいの忠実さまで見せた。

少女はほつと安堵の息を吐き、眼前のマツドウルフの頭を数回撫でる。次いで黒狼を立たせると、少々頼りない背中に静かに跨つた。

まだ子供の狼だが、少女の小さな体を支えるくらいは容易なようだ。

そして少女がぽんぱんと黒い背中を叩くと、黒狼は勢いよく獣道を駆け出した。

自分で走るより何倍も強い風に髪を煽られながら、少女はふと、右手の甲に目を落とした。

種族・マツドウルフ

ランク:D

Lv.13

スキル・【威嚇】【獣賞銳敏】

目に入つたそれを見て、少女は再びこう思う。

——やつぱり私は一人ぼっちだ。

朝。

東の空から差す日の光に当たられて、今日も街は元気に目を覚ました。

大通りには人とモンスターが織りなす喧騒が響き、ティマーズストリートらしい活気が溢れている。

そんな中、僕——ルウ・シオンは、パーティーメンバーのクロリアと一緒に大通りから脇に逸れた薄暗い小道を歩いていた。

僕たちがそれぞれの胸に抱いているのは、自分の相棒であるスライムのライムと、ハビネススライムのミュウだ。

活気に満ちたメインストリートとは違つて人がほとんど寄り付かず、日の光が入りづらいため、まだ朝靄の晴れていない細道は肌寒い。

ようやく目的地の小屋の前にたどり着くと、僕は一拍問を置くように白い息を吐いてから、年季の入つた扉に手を掛けた。

「はい、いらっしゃ——おっ、ルウ君とおさげちゃんじやん」

僕の顔を見るなり、彼女はすぐっと席から立ち上がった。

猫耳のおもちゃを載せたクリーミー色の長髪と、同色のドレスエプロンを揺らしながら、散らかっている部屋を軽やかな身のこなしで通り抜けてくる。

『ティマーズストリート唯一の魔石鑑定士であるペルシヤ・アイボリーさんだ。』

『怪我はもう大丈夫なのかな?』

目の前で立ち止まつた彼女は、僕の体をあちこち見回して心配そうに問いかけた。

「あつ、はい。なんとか」

「そつか、それなら良かつた」

非道なモンスター研究を進める集団『モンスタークライム』との一戦から二日。

約束していた次の日になつてしまつたが、僕は冒險者ギルドのシャルムさんから預かつた魔石の鑑定結果を受け取りに来ていた。

本当だつたら昨日のお昼にここに来るはずだつたんだけど、僕が寝込んでいたせいでそれは叶わなかつた。

正確に言うと、僕らが戦つたのはモンスタークライムの下部組織『虫群の翅音』だ。

結果的に無事だつたけど、僕が反省すべき点はたくさんあつて、色々と予定変更を余儀なくされた。

「……ごめんね、あたしのせいです。『不正な通り道』のこととか、あの組織のこととか、中途半端に教えちゃつたから」

確かに僕らは、野生モンスターのレベル変動事件の鍵となつた危険なアイテム『不正な通り道』や、あの組織——モンスタークライムの存在について、彼女から教えてもらつた。

組織の名前とか具体的な活動内容については話してもらえなかつたけど、僕は、奴らの危険性を理解できずに無謀にもそのアジトに乗り込んでしまつた。

僕はペルシャさんの憂鬱^{ゆううつ}を払うようにふつと微笑んでみせた。

「ペルシャさんのせいじやないですよ。僕が悪いんです。何も考えずに、一人で勝手に突っ走つちやつたから」

すると突然……

「キユルキユル！」

と、眼下から相棒の鳴き声が聞こえ、僕とペルシャさんは同時に目を丸くした。

腕の中のライムに目を落としてみると、何やら不満げな顔で見上げている。

「一人で」というところがお気に召さなかつたのかな。

僕はごめんと謝る^{あやま}よう^よにライムに笑いかけてから、慌ててペルシャさんに視線^{しせん}を戻す。
「と、とにかく、ペルシャさんは悪くありません。全部、僕のせいです。もし仮に、ペル

シャさんが組織のことを何一つ教えてくれなかつたとしても、きっと自分たちで調べて、

同じ目に遭つていたと思^あいます。だからそんなに気にしないでください」

「……ルウ君」

精一杯^{せいいつぱい}の笑み^{えみ}をペルシャさんに向けると、彼女は申し訳なさそうにドレスエプロンの胸元^{むな}をぎゅっと握りしめた。

「そ、それに……あの戦いで、見えたものもありますから」

ダメ押しとばかりに続けると、なぜかペルシャさんではなく、後ろのクロリアがはつと

息を呑んだ。

僕はクロリアに目配せ^{めくばせ}して、小さく頷いた。

あの戦いで、僕はいくつも間違^{まちが}いを犯してしまつた。けど、得られたものだつて相応^{さうおう}にある。

僕はこれから戦い方と、目標を見出す^{みいだ}ことができた。

僕はもつと強くなる。もう誰も失わないように。

その様子から何かを察したのだろうか、ペルシャさんは優しく微笑んで頷いてくれた。
「……そつか」

彼女は穏やかな顔で僕たちを部屋の奥へと招き、席を勧めた。

「二人とも座つてて。すぐに鑑定結果を書いた紙と、預かつた魔石を持つてくるから。……それと、せつかくだらちよつとお茶してかない？」

テーブルの上にあつた白いポットを持ち上げて、お姉さんは僕たちを甘く誘惑^{ゆうわく}した。

香り高い湯氣^{ゆうき}に包まれた小部屋^{ひや}の中。

僕たち三人は自分の従魔^{ひきもの}を膝^{ひざ}に乗せ、部屋の真ん中に置かれたテーブルについている。
卓上^{たくじょう}にはそれぞれのティーカップと甘いお茶菓子^{おのの}。各々それを口に運びつつ、時々従魔にも分け与えながら楽しい会話に花を咲かせていた。

「ルウ君はどんな食べ物がお好きなのかな?」

ペルシャさんはニコニコしながらお茶会には欠かせない、何気ない話題を振つてくる。

「食べ物ならなんでも好きですよ。でも強いて挙げるなら、お野菜ですかね」

僕は甘いお菓子を頬張りながら答える。

するとペルシャさんは、僕の細い腕を凝視して、少し意地悪にニヤリと口元を歪めた。

「はあ〜ん なるほどね。だからそんなに細つちいわけだ」

「そ、そんなに細くはないですよ。身長だつてまだ伸びますし」

僕は腕を隠すように身をよじる。

確かに他の人と比べると、少々肉付きが悪く思えるが、これでもまだ身長は伸びている。

それに、最近は体を動かすことが多かつたから、筋肉だつてついてきた。

まあ、野生モンスターと一対一でやりあうにはまだまだ不十分だけど。

「で、おさげちゃんは?」

「えっ!?

話を振られるとは思つていなかつたのか、黒髪おさげのクロリアは、びくつと肩を揺らす。

なぜか彼女は僕と同じように身をよじり、頬を赤らめながら答えた。

「わ、私は……お肉、ですかね?」

そこでペルシャさんの目が猫のようにギラリと光り、熱い視線を「ある一点」に集中させた。

「ははあ〜ん、どうりでねえ」

「……」

ペルシャさんに釣られて、僕もクロリアの胸元を見てしまう。

だが、クロリアはすかさず僕の方を睨みつけたので、瞬時に顔を背けた。

そういえばクロリアはいつもたくさん食べるなあと、無理やりに思考を逸らそうとしている間にも、後ろからペルシャさんの声が聞こえてくる。

「お姉さんはそんなに恵まれてないからねえ。あたしもお肉食べようかなあ」

「……」

早く話題を変えなければ、と思ったのはクロリアも同じだつたようで、彼女は軽く咳払

いして空氣を変えた。

「こほん。と、ところで……」

「んつ?」

「こうしてわざわざお茶会を開いたということは、私たちに何か話したいことでもあつたんじゃないですか?」

「えつ? ただ一人とお喋りしたかつただけだよ」

「そ、そ、なんですか？」

「うん！」

ペルシャさんは屈託のない笑みを浮かべて大きく頷いた。

やつぱり……

これまでの言動を見ていれば、彼女はそういう人物だと分かる。

特に深い理由がなくても僕たちをお茶に誘ってくれる人だ。

「あっ、でも、ちょっと二人に伝えておくべきことがあるのも事実かな」

彼女はそう言って突然、何かを思い出したように真顔に戻った。

「えっ？ それって……」

ペルシャさんは緊張感を和らげるために膝の上に寝かせた猫の従魔——シロちゃんを数回撫でてから、おもむろに口を開いた。

「『不正な通り道』について」

「——つ?！」

僕もクロリアも、思わず言葉をなくして固まってしまった。

『不正な通り道』——使うだけでモンスターのレベルを上げられる夢のアイテムと謳われているが、実際は副作用満載で猛毒と言つても差し支えない代物だ。

僕たちにとつては、因縁深いアイテムである。

ペルシャさんによれば、その実態はいまだ解明に至っておらず、対策にも手をこまねいでいるという話だつたけど。

彼女は、楽しいお茶会の空気に水を差してしまつたことを申し訳なく思つたのか、改めて問いかけてくる。

「この話、聞く？」

言い知れぬ不安を払うために膝上の相棒に手を触れる。

顔を見合させてクロリアの意思を確認した僕は、ペルシャさんに頷き返した。

「お願ひします」

ペルシャさんは「うん」と小さく頷くと、活発な普段の様子からは考えられない優美な手つきでカップを手に取る。

そしてお茶を一口含んで、喉を湿らせてから話を始めた。

「モンスタークライムの『虫群の翅音』が牢獄送りになつたことは知つてるよね？」

「は、はい」

「そのうちの一人が、あの『不正な通り道』を持つてたらしいんだよ」

そういうえば僕とライムが奴らのアジトに踏み込んだとき、奴らはちょうど

『不正な通り道』の実験中だつたはず。

結果的に僕らは、小鹿型モンスターのベビールージュにそれが投与されるのを防いだ。

『虫群の翅音』

「虫群の翅音」のリーダーのビィは『不正な通り道』を持つたまま捕まつたのか。「事前に判明していた情報のとおり、『不正な通り道』は魔石加工品の一つらしいんだよね。形は小さな球状。どんな魔石が使われているかは、『虫群の翅音』の連中も知らないみたい」

途中で卓上の小皿からお茶菓子を一つ摘んでシロちゃんにあげながら、ベルシャさんは話を続けた。

「モンスターに与えるだけでレベルが上昇する。それ以外のことは何も知られていないし、調べようとも思わなかつたみたい。だから奴らから何かを聞いて、『不正な通り道』の治療薬を作るのは不可能だつてさ。……この街で二人が暴走を止めたつていう獣種のミークベア、覚えてる?」

「は、はい」

「あの子も『不正な通り道』を投与されたせいで、今は暴走状態にある。治療薬も作れないから、しばらくは預り所の鉄格子の中に入れておくつてさ」

「……」

僕は主人と引き離され、鉄格子の中で苦しそうに――あるいは悲しそうに吠え続けるミークベアを思い、唇を嚙んだ。

ベルシャさんはそんな僕に慰めの言葉を掛けてくれた。

「別に、ルウ君が気にすることはないよ。『不正な通り道』は投与された後だつたわけだし、ミークベアを最小限の被害ひがい止められたのは君たちのおかげなんだから。あの場に居合わせた人たちはみんな、ライムティマーなのに本当にすごい、よく頑張つてくれたつて褒めてたらしいよ」

「い、いえ……」

「それにね……。ルウ君たちがそこから、『虫群の翅音』の尻尾を掴んで、捕まえてくれたおかげで、モンスタークライムの内部構成もある程度明らかになつた。これは本当に大手柄さ」

「えっ?!」

その知らせには僕のみならず、クロリアも驚きの声を上げた。

「どうも奴らは同種のモンスターを持つ者同士で固まる傾向が強いみたいね。昆虫種の上の成果があつたみたいだ。

モンスタークライムの内部構成まで判明しただなんて、あの戦いには自分でも思つた以上の大成果があつたみたいだ。

「どうも僕たちは同種のモンスターを持つ者同士で固まる傾向が強いみたいね。昆虫種の従魔を従えていたるティマーで構成された、『虫群の翅音』。他にも、獣種の従魔を持ちが集まつた『獣列の闘歩』。爬虫種の『サバントデュオ』なんて、パーティもあるらしい。他にもまだたくさんあるって話さ」

「他にも、たくさん……」

これには絶句せざるを得なかつた。

クロリアも同様の衝撃を受けたのだろうか、一度唾を呑み込んでから質問を投げかけた。

「そんなに、モンスタークライムという組織は大きいんですか？」

「うん、だろうね。奴らはパーティごとに独自に行動する傾向があるみたいだから、組織の全体像は掴みづらい。最悪の場合 モンスターの種族の数だけ、そういうパーティがあると考えた方がいいかも」

背筋が凍りつきそうな予想を口にしたペルシャさんは、再びティーカップに口を付けた。

僕もクロリアと同様に疑問を口にする。

「どうして奴らは、同種で集まるようなことをしているんでしようか？」

「さあ？ でもまあ、同種のモンスター同士なら互いに手の内が分かる分、連携が取りやすいし、何より技が嵌れば強力だからね。そういう意味もあって団体行動をとつてゐんじゃないかな」

ペルシャさんの説は、なかなか説得力があつた。

ビィは仲間と連携するなんて考えをまるで持つてはいなかつたけど、それは僕とライムを軽視していたからかもしれない。

あの恐ろしい敵との戦いを思い出し、僕は密かに敗北の味を噛みしめる。

その微妙な空気の変化を察したのだろうか、ペルシャさんがにこやかな様子で言つた。

「それに……同じ種のモンスターっていふのは引かれやすい。その主人たちも同様に、気が合うみたいだよ」

ペルシャさんは僕とクロリア両方を左右の手で指差した。

彼女はその指を次第に近づけていき、意味ありげにピタリとくつつけた。

実際、初めて僕たちが会つたときには、僕がライムを抱えていたからこそ、クロリアは話しかけてくれたんだと今でも思つている。

そういう意味では僕もその説には同意なんだけど……なんだかペルシャさんの言い方は別の意味が込められていそう。
本当にこの人は、僕たちをからかうのが上手だと、改めて実感した。
この恥ずかしい空気に堪えかねたのか、クロリアが僕から目を逸らしたまま素早く立上がる。

「そ、その……お茶、とっても美味しかつたです！ ご馳走様でした！ わ、私とミユウは先に出て外で待つます！」

そう言い残し、黒髪おさげの少女はぴゅーっと飛ぶような勢いで魔石鑑定所ペルシャスタジオを後にした。

ペルシャさんはそんなクロリアの様子を見て、にやははは、と愉快そうに笑つ。
本当なら僕も早急にこの場から逃げ出したいくらいなのだけど、そうもいかない。

僕は気まずい思いをしながらペルシャさんの笑いが収まるのを待った。

ほどなくしてペルシャさんは表情を戻し、話を終わらせる。

「あたしが事件後に聞いた話はこれくらいだよ。ちょっとばかり情報が少なくてごめんね」

「い、いえ。とても参考になりました」

手を合わせて申し訳なさそうにウインクするお姉さんに、僕はかぶりを振つて応える。

情報が少ないなんてとんでもない。むしろこの人は、いつたいどういう情報網を持つているのか、そちらの疑問の方が大きくなつていくばかりである。

彼女は、『少し待つてね』と言つて立ち上がり、部屋の奥へと姿を消してしまう。すぐにテーブルに戻ってきた彼女の手には、大きな袋が下げられていた。

「ほい、ご依頼の鑑定、きちんと完了いたしました」

「えつ……あつ、はい、ありがとうございます」

半ば本来の目的を忘れかけていた僕は、一瞬戸惑つてから慌ててそれを受け取る。

鑑定依頼を出していた、グロッソ周辺の魔石だ。

かなり重たいその袋の中には鑑定結果を書いた紙も入つていて、これで彼女への依頼は完了ということになる。

僕はギルドから預かった鑑定料を支払つた。

「まいど！」

「あ、お茶とお菓子、とつても美味しかつたです」

僕がそう付け加えると、ペルシャさんは嬉しそうに顔を綻ばせて、お姉さんらしい眼差しを向けた。

「にやはは、そりやどうも。『虫群の翅音』のリーダーが捕まつたとはいえ、くれぐれも、モンスタークライムには気を付けてね」

ペルシャさんは改めてそう忠告してくれた。

「はい」

僕は魔石入りの袋を背中のカバンに仕舞いながら、真剣な表情で頷いた。

話をしてくれたペルシャさんに迷惑を掛けないためにも、モンスタークライムには気を付けるつもりだ。

「では、僕はこれで」

名残惜しさは感じながらも、僕はライムを抱えて一步を踏み出す。

外でクロリアも待つてゐるんだし、もう少しお話ををしていたいなんて甘えたことを言つてはいけない。

何より、長居したらペルシャさんの商売の邪魔になる。

僕は寂しさを紛らわすように、相棒を強く自分の身に引き寄せた。

そこに――

「ちょっと待つて！　あつ、えつとお……」

不意に後ろから呼びかけられた。

振り向くと、魔石鑑定士のお姉さんは、何か言いたげな様子で中途半端にこちらに手を伸ばしていた。

気まずいというか恥ずかしそうに目を逸らし、それでも僕たちを引き止めるように白くて細長い腕を伸ばしている。

若干頬が赤らんでいて、反対の腕では僕と同様に自分の従魔をぎゅっと抱き寄せているのも可愛らしい。

無性にからかってみたい衝動に駆られたものの、僕はなんとかその気持ちを押しとどめた。そして、彼女の羞恥心に触れないよう、至って事務的な發言をする。

「あの、追加で魔石鑑定の依頼をしてもいいですか？　お代は後払いです」

そう言つて、僕は手持ちの魔石をいくつか彼女に手渡す。

「えつ……？」

ペルシャさんはきょとんと目を丸くして、少しの間を置いて、はつとなつた。どうやら、僕の意図を理解したらしい。

つまりこれは再会の約束。

いずれ鑑定結果を聞きにこの街に戻ってきて、ペルシャさんに会いに来るという約束だ。彼女は猫耳のおもちゃをピコピコ揺らし、頬が緩まないよう口元をもじもよさせている。

彼女の意外な一面を見て、僕は思わずくすつと小さな笑い声を漏らしてしまう。

「むむっ……なるほど、そうやつておさげちゃんも落としたわけか？」

魔石鑑定士のお姉さんは、少し頬を膨らませながらそつと呟いた。

「はいっ？」

「うんにや、なんでもない。魔石鑑定の依頼ね。りよーかいしました」

心なしか素っ気ない感じでそう言うと、ペルシャさんは机の引き出しを漁りはじめた。

たぶん依頼内容をまとめる紙を取り出そうとしているのだろう。

そんな彼女の後ろ姿を見ながら、僕は考える。

おそらくここを訪ねるお客様は、ベテランの冒險者が生産系の職業についている人たちはかりなんだと思う。そんな中、僕とクローリアは久しぶりに来た年下のお客さんで、たぶん弟や妹のような存在に見えたんじゃないだろうか。

いずれにしても、久しぶりに来た絡みやすいお客様だったことは間違いない。

だからこそ、こうしてお茶に誘ってくれたり、時々からかつたりしてくれるんだ。きっとペルシャさんも、僕と同じような気持ちになつたんじゃないかな。

「そうだつたらいなあ……
なんて思つてゐると、振り向いたベルシヤさんと目が合う。
書類を差し出す彼女はどこか悔しそうにむつとしていて、それでいて頬つぺたが赤くなつてゐるような気がした。

2

「二人とも、ご苦労だつたな」

「い、いえ」

クロリアは少しばかり緊張をにじませて応える。
久しぶりに戻ってきたグロッソの街は、ティマーズストリートには及ばないながらも相変わらず賑わいを見せていた。

ティマーズストリートを旅立つてから三日。

僕たちは無事にグロッソの街まで帰つてきて、ようやく魔石運びの依頼を完了させることができた。

日数にしてみれば二週間も経つていないので、一ヶ月は働いたような感覚がある。

ともあれ、これで依頼達成。僕とクロリアは報酬の五万ゴルドを受け取つた。
なんだか割に合わない気もするけど、仕事量が増えたのは全部自分のせいなので、何も言ふまい。

心中で不平を漏らしていると、シャルムさんが從魔たちにも労いの言葉を掛けてくれた。

「お前たちも、ご苦労だつたな」

「キュルキュル」

「ミユウミユウ」

頭上で嬉しそうに揺れるライムをちらりと見ながら、僕は疲れから可愛げのない一言を口にする。

「まあ、ただ魔石を運んだだけですけどね……」

するとシャルムさんは肩をすくめて、呆れ笑いを浮かべる。

「私が言つたのは、そちらのことではない」

「……?」

「もちろん、依頼の方もだが、私が言つたかったのは、組織のことだよ」

「あ、ああ……そういうことですか」

ギルドの情報網のおかげだろうか、シャルムさんはすでに向こうで起きたモンスターク

ライムとの事件について把握しているらしい。

まあそれこそ自業自得なので、勞つてもらえる立場にないのは自覚している。

……なんて思ついたら、目の前のシャルムさんは頭を下げる。

「大変なことに巻き込んでしまい、申し訳なかつた」

「な、なんでシャルムさんが謝るんですか!? 勝手に首を突っ込んだのは僕の方なのに」

「いや、それでも謝らせてくれ。君の性格なら、事件の詳細を知れば当然止めに入ること

は予想できた」

「…………？」

「とにかく、本当に申し訳なかつた。ギルドの職員としても、一人の人間としても責任を取るつもりだ。私にできことがあるならなんでも言つてくれ」

「「ええ!?!」」

なぜかクロリアは僕以上に大きな驚きの声を上げた。

まあこの場合だと、クロリアもシャルムさんの謝罪と償いの対象になるわけだから、びっくりするのも頷ける。

けど、大人の女性に「なんでも言つてくれ」と言われてドキッとするのは、男の子の特權のはず。

言葉のインパクトのせいか、ついつい僕は「じゃあ、一回デートしてください!」なん

て返事をしたらどうなるか……と想像してしまう。
しかしその瞬間――

「…………！」

背中に突き刺さるような視線を感じた。

それだけは口にしてはいけないような気がする。

冷や汗を流し、僕はやむなく至つて紳士的なお願いでこの場を切り抜けることにした。

「じゃ、じゃあその、依頼を紹介してもらえませんか?」

「…………依頼?」

「は、はい。鋼級(ブロンド)でも受けられて、なるべく稼ぎのいい依頼を」

シャルムさんはギルドの職員として責任を取ると言つたんだから、そちらのお願いをす

るのがこの場に相応しい。

しかし彼女は、僕がなぜそんなことを言い出したのかと不思議に思つてゐるらしく、しばし首を傾げてこちらを見据えていた。

髪色と同様、クールな赤眼に見つめられた僕は、思わず目を逸らしてしまった。

そして気恥ずかしさを諂魔化すように、お願いの意図を話した。

「僕たち、いずれティマーズストリートに拠点を移そうと考えているんです。そのための

資金集めと言いますか、貯金くらいはしておこうかなあ、と」

ちらりと振り返ると、クロリアは無言で頷いて僕の言葉に同意してくれた。
拠点を移す話は、グロッソの街に帰つて来る間に彼女と相談したことだ。

理由は色々ある。

まずティマー関連の施設の規模が他の街とは違う。便利だし、ティマーとして成長するならあそこが一番と決まっている。活気ある街の雰囲気も僕好みだ。

それに、ペルシャさんとの約束もあるから。

とは言うものの、拠点移動は良いことばかりではない。

あそこにある冒険者ギルドは本部。依頼のほとんどが難易度の高い銀級以上のものになつていて、もちろん、銅級の依頼が一つもないわけではないけど、なんの備えもなしに行けば、受けられる依頼がなくて生活に困るのは目に見えている。

だからこそ貯金だ。

シャルムさんは、そんな僕の考えを分かつてくれたのか、柔らかい笑みを浮かべていた。
しかしそれは、すぐに呆れ笑いに変わってしまう。

「……無欲だな」

「えつ？」

「いや、なんでもない」

むしろ今のお願いは、金銭欲にまみれた超絶欲深いものだつた気がするけど。

今度は反対に僕が首を傾げていると、シャルムさんは受付の引き出しを漁つて数枚の紙を取り出した。

どうやら依頼内容が書かれた用紙のようだ。

彼女はカウンターの上にそれらを広げて一枚一枚吟味した後、小さくため息を吐いて肩を落とす。

紹介できそうなものが見つからなかつたのかもしれない。

次いで彼女は、なんとなくといつた感じで壁に備え付けられた掲示板に目をやつた。

話題の情報や急募の依頼などが貼りだされている、誰でも閲覧可能な掲示板で、主に冒険者からは『クエストボード』と呼ばれている。

「銅級でも受けられて、なるべく稼ぎのいい依頼だつたな」

「……はい」

シャルムさんはしばらく掲示板とにらめっこしてから、小さく頷いて僕たちに視線を戻した。

シャルムさんの艶やかな唇が魅惑的に緩んでいるのを見て、僕は自然と身構えてしまつた。

期待する反面、ちょっと怖い気持ちも湧いてくる。

そして彼女は、男心をくすぐる色っぽい笑みを浮かべて、その依頼内容を僕たちに教え

てくれた。

「『エリア探索』なんてのはどうだ?」

野生モンスターが出現する地域を、モンスターの強さや特性に応じて区分したもの——それがエリアだ。

草原、森、砂漠、火山、遺跡など、様々なエリアがある。

乱暴に言えば、野生モンスターが出現する地域はなんらかのエリアに組み込まれていると考えていい。

エリアごとに出現するモンスターは異なり、そのエリアの特色が顕著に表れるところである。もちろん、モンスターの強さ——ランクにも、エリアごとに大きな差がある。EやFといった低ランクモンスターのみのエリアや、CやBといった高ランクモンスターが大量に出没するエリアまで。

その危険性に応じて、エリアにもランクが定められている。

未知の領域に入るときはこのランクを目安にするのが、ティマーとしての常識だ。

「エリア探索……ですか?」

「ああ」

どんな依頼内容だか想像がつかないな。それに、なぜそれが儲かるのかも。けれど、正確無比な仕事つぱりのシャルムさんが言うのだから、間違いはないのだろう。

「普段、君たち冒險者は、討伐をはじめとした依頼をこなしながらモンスターの魔石やそこらに落ちているアイテムなどを集めて換金するだろう? エリア探索というのは、言つてしまえば魔石やアイテム採取をするということだ」

「は、はあ……」
鈍い返事をしながらも、僕は心の中で密かに納得する。

確かにそれなら、銅級の僕たちでも問題なく参加することが可能だ。
エリアに入るのは自己責任であり、その成果もまたすべて自分のものにできる。
でも……。

「それが今、僕たちが一番稼げる依頼なんですですか?」

その疑問だけはどうしても払拭できないので、生意気にもそう聞いてみた。

僕はまだ村を飛び出したばかりの新人冒險者だ。『虫群の翅音』のアジトがあつた『クリケットケージ』という昆虫エリアを除けば、E、Fランクのエリアにしか入ったことがない。

そんな低ランクエリアで手に入る魔石やアイテムを換金しても、その日の食費になるからならないかの金額だ。當時金欠の僕たちは、いつもそのことで頭を抱えている。
「まあ、ピンと来ないのは当然だと思う。エリア探索はいわばサブの依頼——ついでのよ

うなものだからな。報酬の低さが何よりそれを物語っている

しかし彼女は前屈みになり、受付カウンター越しに顔を近づけて、声を落として続けた。

「……だが、それが今一番稼げる」

「えつ……？」

「最近の野生モンスターのレベル変動が原因で、魔石の換金レートにも混乱が生じているのは知つてのとおりだ」

「は、はい」

「は、はい」

「今回ペルシャから受け取つて来てもらつたこの鑑定結果をもとに、モンスターの強さと魔石の換金レート、それからエリアのランクを再設定する予定でいる。……で、ここからが本題だ」

僕たちが持ち帰つた鑑定結果の用紙をひらひらさせて、シャルムさんはやりと小悪魔的に笑つた。

「再設定する予定でいる——ということは、今はまだ新しいランクは定められていない。注意勧告して立ち入りを制限する程度の対策しかとられていないのだ。そこで……」「……？」

「エリア内のアイテムを、今のうちに大量に抱え込んでおけ」

「えつ？ それってつまり……？」

彼女は口元に手を当てて、内緒話をするように続けた。

「じきにこの辺りのエリアのランクも高く設定され、そこで取れるアイテムの価値も向上する。そのタイミングで換金すれば、今よりはるかに高い報酬を得ることができるぞ。おそらく、銀級依頼の報酬に相当する額だ」

「シツ——銀級！？」

思わず目眩を覚えたが、寸前で持ちこたえて、高鳴る心臓を鎮めながら問いかげた。

「そ、それって、犯罪なんじゃ……？」

「別に、罪に問われるようなことはない。換金価値が上がると予想した物を、事前に確保しておくだけのことだ。それに、実際にエリア内のモンスターたちは格段に強くなっていますから、相応の実力がなければ実行不可能。近々ランクが再設定されてアイテムの価値が上がるごとに気が付いていても、力不足で手を出せずにいる冒険者だっているのだ。実力と推測がすべて。何が悪い？」

「……」

ごもつともな意見を聞かされて、僕は言葉をなくしてしまう。

だけど複雑な思いが消え去ることはなく、思わず口元をもよもよとさせた。

確かに罪に問われることじゃないのかもしれないけど、今の悪環境を利用しているみたいで、ちょっとばかり気が引ける。

でも、相応の危険が付いて回るのだから、当然の見返りか？

などと悶々と思いつ悩んでいると、シャルムさんが取り繕うように曖昧な笑みを見せた。

「まあ、その……無理強いするつもりはない。言わばこれは裏道。自慢できるような方法ではないからな。君たちが気乗りしないのならば、私が担当している高額報酬の依頼を優先して回そう」

いつも眞面目に仕事に取り組んできたシャルムさんが、珍しく口を滑らせて悪知恵を吹き込んだ。それを必要以上に気にしている姿を見て、ついくすっと小さな笑いが漏れてしまう。

次いで僕はかぶりを振り、笑顔で返した。

「いえ、せっかく教えてもらったことですし、やつてみようと思います、エリア探索。ねつ？」クロリア

「えつ？」あつ、はい」

突然話を振られたクロリアは慌てて頷いた。

僕たちが断ると思っていたのか、シャルムさんは一瞬目を丸くした後、安堵の息をついた。

「……そつか」

魔石運びの依頼で僕たちをモンスタークラインと接触させてしまった」とへの償いと

して、シャルムさんはとつておきの高報酬の依頼を紹介しようと奮起してくれた。

それは悪いことではないのだし、モンスタークラインの件も彼女が気にすることではない。

シャルムさんはいつもどおり笑つていてほしい。

僕がエリア探索の依頼を承諾すると、シャルムさんはギルド職員として助言をしてくれる。

「おすすめ、というわけではないが、もしエリア探索をするならば、『フローラフォレスト』がいい。この街からも近いし、あそこで取れる花は元々高価値だからな」「は、はい。なら、そつすることにしま……す？」

途中で言葉を詰まらせた僕は、根本的なことに気づいて聞き返した。

「あの、フローラフォレストってどこですか？」

「んつ、そつか、君たちはそもそもこの街の住人ではなかつたな。フローラフォレストというのは、ここから東にある森——君たちが冒險者試験を行なつたあの森だよ」

僕とクロリアは同時に、ああ、と納得の声を漏らす。

冒險者試験で、『マッドウルフの魔石』と『フェイクトの花』という二つのアイテムを取りに行つた場所だ。

冒險者になつてからも、ワイザートレントという樹木型モンスターの討伐依頼で赴いた

こともある。

なんとなく、東の森^{あじ}なんて味気ない名前で呼んでいたけど、フローラフオレストといふ綺麗な名前が付いていたとは、全然知らなかつたなあ。

試験のときに取つてきてもらつた『フェイトの花』もそうだが、他にも高価値で希少なアイテムが存在する。その一覧^{いちらん}を渡しておくから、なるべくその中のアイテムを取つてくるといい」

「は、はい。何から何までありがとうございます」

そう言つてシャルムさんは席を立ち、受付の奥から一枚の紙を手にして戻つてきた。

フローラフオレストで取れるアイテムの一覧表。

それを受け取り、そして採取するアイテムにある程度の目星^{めぼし}を付けると、僕たちはさつそくエリア探索に出発しようと立ち上がる。

ティマーズストリートでの夢の生活のために、いざ出陣^{しゆじん}。

その一步を踏み出したとき、不意にシャルムさんの声が背後から聞こえた。

「気を付けるんだぞ」

「えっ？」

「あの森は、試験当時はEランクエリアだったが、今では間違いなくDランク以上のエリアだ。今の君たちの実力なら問題ないと確信しているが、マッドウルフやワイザートレン

トなど、以前戦つた敵は比べものにならないほど強くなつてていると思え。だから……」「油断するな、ってことですね」

「…………ああ
神妙な面持ちで頷き返してくれるシャルムさん。

他の冒險者たちが二の足を踏んでいるこのエリアの探索のことを、躊躇いもせば僕たちに教えてくれた時点で、実力を疑^{うなが}われていないのは分かつていて。それでも自分が担当している新人冒險者の安否^{あんぴ}となれば、心配になつて当然だ。

何が起つるか分からないし、僕たちは高ランクエリアでの経験が皆無^{かいつむ}なのだから。

僕はシャルムさんに不安を与えないように、曇り^{くも}のない笑みを浮かべて口を開いた。

「心配には及びません。それに……ちょうど強い相手と戦つてみたいと思つていたところですから」

その言葉に同調するように、頭上のライムが「キユルル！」と可愛らしい鳴き声を上げた。

* * * * *

や街に近いエリアほど、ランクは低い。

今まで遠征らしい遠征はおろか、ろくに依頼の数もこなしていない僕らは、当然のごとく近場の低ランクエリアにしか入ったことがない。

そんな中でいきなり到來した、Dランクエリア挑戦のチャンス。従来のランク設定のバターンをぶち壊し、街のご近所にあつた森が、Dランクまで成長してしまつた。

この機のがを逃すわけにはいかない。

報酬獲得の目的もあるけれど、何より僕の——僕たちの成長のためになる。

「「「グルウウウ！」」」

薄暗い森の中に、野太い獣の唸り声が響き渡る。

数は三つ。全身の黒い毛を針のように逆立てて、鋭い眼光でこちらを睨みつけている。マッドウルフ、Dランクモンスター。

かつて冒險者試験のときに対峙したそのモンスターと、僕たちはぶつかり合う。

「ライム、体当たりだ！」

「キュルキュル！」

まずはライムが先行する。

横一列に並んだマッドウルフの真ん中の一匹を狙い、勢いよく飛びついた。

しかし黒狼は余裕を持つてそれを躰すと、ライムを取り囲むように三角形の陣じんを組む。

初手は様子見、なんて考えていたけど、今の攻防だけでマッドウルフたちはかなり強くなつていて分かつた。シャルムさんが言つてたとおりだ。

モンスタークライムとの一戦を経て、ライムはレベル20（ミドルライン）に到達した。そのライムの攻撃をあつさり躰すだなんて、冒險者試験当時のマッドウルフとは明らかに違う。

その推測を肯定するように、一匹の黒狼が牙を剥き出してライムに襲い掛かった。

「グルア！」

ライムはそれを回避して反撃を試みるけど、間髪を容れずに次の黒狼が飛び掛かつてきで難しい。

『不正な通り道』の影響で強くなつてゐるマッドウルフを、ライムだけで三匹同時に相手にするのは不可能だ。

だからこそ、いい実験になる。

僕は小さく息を吐き、左腰に帶びた木劍に手を伸ばした。

カラカラと特有的の音を発しながら抜刀すると、すかさずライムと黒狼が交戦しているところに飛び込んでいく。

上段に構えた木劍を、ライムを取り囲む一匹に振り下ろした。

「う……らあ！」

気合を上げながら放つた一撃は、当然のことながら避けられて、虚しく空を切る。

しかし、一匹が飛び退いてくれたおかげで隙間ができた。

ライムはそこから抜け出していく。

僕は相棒と共に後ろに下がり、三対二の構図に戻った。

しかし、怒りの咆哮とともに一匹が弾かれるよう駆け出していく。

——速いっ！？

驚いたのも束の間、すでに黒狼はライムに囁みつくべく跳躍していた。

僕は瞬時に両者の間に割つて入る。

木剣を横に倒し、盾のようにしてそれを構えた。

ここからが、僕たちの新しい戦いだ。

ガツッ！ と音を立てて、木剣の腹に黒狼が囁みつく。

その重さで手にしづれを感じながらも、僕は奥歯を囁みしめて両足を踏ん張る。

そこそこ丈夫なはずの木剣がギリギリと軋んで、悲鳴を上げる。

しかしその程度で済んだのを確認すると、黒狼を振り払うように木剣を振り上げた。はずみで歯が外れ、マッドウルフが宙に浮く。

すぐさま僕は素早くしゃがみ、背後に隠れていたライムがびょんと跳ねた。

【リミットブレイク】！

「キユルル！」

頭上を通り過ぎざま、ライムが赤熱したように赤く染まる。

そして空中で身動きが取れないマッドウルフに、ドンッ！ と全力の体当たりをお見舞いした。

『ギヤンツ！』と大きな悲鳴を上げて吹き飛んだ黒狼は、はるか後方の大木に激突し、その根元にパタリと落ちた。

予想以上に連携が上手くいき、僕はライムと笑みを交わす。

しかし、仲間をやられて怒りを覚えた残りの二匹が、一斉にこちらに向かつて走り出してきた。

二匹とも僕を狙っている。

しかし今度はライムが間に割つて入って、一匹の動きを止めた。

もう片方のマッドウルフを僕が相手にし、無理やり一対一の構図に持つていく。

これなら相手に連携をとられる心配はないし、単体相手なら【リミットブレイク】を使ったライムの方が上だ。

僕が木剣で牽制してなんとか一匹を止めていると、後ろからズシンツ！ と衝撃音が聞こえてきた。

どうやらライムがもう一匹のマッドウルフを大木に吹き飛ばしたらしい。
さすがライム、と心中で賞賛の声を送りながら、相棒に負けじと僕も突っ込む。
けれど、やはり人間とモンスターとでは力の差がありすぎる。

木剣を避けられ、目眩ましに足で蹴り上げた泥も回避されて、打つ手がなくなってしまった。

しかし、この一瞬の隙を生んだだけでも、僕にしては上出来だ。

黒狼の後方から、赤い影が迫る。

僕に気を取られていたばかりに、マッドウルフは後ろからのライムの接近を許してしまった。

ドンッ！ と鈍い音が薄暗い森の中に響き、枝葉がガサガサと踊り狂った。

ようやくこれで、三匹のマッドウルフは、皆ライムの攻撃で魔石へと姿を変えたのだ。

長らく続いていた緊張を解いて、僕は深く息を漏らす。

木剣を左腰の鞘に戻すと、体が赤いままでのライムを頭に乗せて振り返る。

そこには笑顔でパチパチと拍手をする、クロリアの姿があつた。僕と同じく、ミュウを頭の上に乗せている。

「お見事です！ ルウ君、ライムちゃん！」

「ミュミユウ！」

「ありがとう、二人とも」

「キュルキュル！」

僕たちは笑顔で手を打ち合わせた。

戦闘後の僕と同じくらい、クロリアの手が熱い。きっと僕たちの戦いをハラハラとした気持ちで見守っていたからだろう。

無茶なことをしたと内心で反省しながら、マッドウルフの魔石を回収する。

その最中、クロリアがため息まじりにこぼした。

「戦いの前に、僕とライムだけでなんとかするから」と言われたときは何事かと思いましてけど、今の連携を試してみたかったんですよね、ルウ君」

「うん、そうだよ」

僕は三つの黒い結晶をポーチに仕舞いながら頷いた。

僕がそう言つたのは、何を隠そう、新しい戦い方を試してみたかったからである。

「僕が敵の攻撃をいなして、その隙にライムが攻撃する。今まで全部ライムに頼りつきりだつたから、少しでもライムのサポートができるらしいなと思ってさ。これなら、一緒に戦えるし」

僕は左腰の木剣に手を当てながら言う。

僕にできることなんて、本当に限られている。

ライムはスライムは世界最強 3

立ち読みサンプル はここまで

その中の一つとして、敵の攻撃を受ける役になれないかと考えたのだ。

ビィと直接戦ったとき、互いの実力差はそんなにかけ離れていないと感じた。

しかしBランク以上の従魔が持つ、アビリティなる特殊な力のせいで、勝敗が逆転してしまったのだ。

改めてティマーとしての実力不足を痛感させられた。

もっと戦術の幅を広げられないかと思つて考えついた作戦が、この戦法。

僕が敵の攻撃を「弾き」し、すかさずライムと「交代」する。

これこそが僕たちの新しい戦い方。

いつもも前みたいに上手くいくとは限らないけれど、確かな手ごたえを感じて頬が緩む。

それを見て、クロリアがなんだか感慨深そうに呟いた。

「……うん。って言つても、本当に小さな前進だけね」

苦笑はじりにそう返すと、彼女はくすくすと笑つた。

小さな前進。たとえ新しい戦い方を見出したとしても、それで僕たちが急激に強くなるわけじゃない。

この戦法が通じる相手は限られている。

さつきのマッドウルフみたいに、僕の体でも受け止められるくらいの、そこまで力が強

